

第70号

発行日：平成26年9月17日
発行者：医学研究科広報委員会
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

- 1面：日本泌尿器科学会総会賞を受賞して、Dr. John Gusdon Memorial New Investigator Awardを受賞して退職にあたって
- 2面：医学研究科長・医学部長寄稿
- 3面：弘前医学会総会AO入試スクーリング開催
- 4面：成績優秀学生表彰
学士編入学試験が終わる
- 5面：膀胱癌に対するロボット支援膀胱体尾部切除術
- 6面：オープンキャンパス開催
青森あすまし温泉紀行
- 7～9面：学生だより、研修医だより
- 10面：Alexがやって来た
- 11面：研究室紹介 整形外科講座
病理診断学講座
- 12面：留学だより、人事異動

題字 前弘前大学長 遠藤正彦氏筆

第102回日本泌尿器科学会

総会賞を受賞して

泌尿器科学講座 准教授 古家琢也



このたびは、第百二回日本泌尿器科学会総会賞を受賞することができ、大変光栄に存じます。ご指導くださった大山教授をはじめ、関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

今回受賞したテーマは、「術前化学療法の後に行つたロボット支援膀胱全摘除術+回腸U字新膀胱造設術の初期成績」です。

膀胱癌、特に筋層浸潤膀胱癌は非常に予後の悪い疾患で、その五年生存率は50%前後です。手術療法は根治性の高い治療法ですが、膀胱全摘除術自体とても侵襲の高い手術であり、さらに膀胱摘除後に尿路を再建する必要のあることから、手術時間が長時間にわた

り、出血量も多いのが難点です。また、自排尿型の尿路変向術である回腸新膀胱造設術は、手技が煩雑であるため、その習得が難しいとされています。そのた



め、膀胱全摘除術+尿路再建術、特に新膀胱造設術は、いまだ難易度の高い手術の一つであります。当科では、筋層浸潤膀胱癌の治療成績を改善すべく、二〇〇五年より患者の身体的負担が少ないゲムシタビンとカルボプラチンを用いた術前化学療法を導入し(J Clin Oncol, Med Oncol)、また膀胱全摘除術においても、より低侵襲な手術を提

供すべく、術式の改善に努めてきました(Eur J Surg Oncol)。一方、我々独自に

考案した、より手技が簡便な回腸U字新膀胱造設術を、これまで二百二十例に施行してきました(Int J Urol Oncol)。これは、国内トップの症例数であり、この術式は、弘前膀胱として国内で広く認識されています。

これらの経験を踏まえ、さらなる治療成績の向上と低侵襲手術をめざし、二〇一二年四月より膀胱全摘除術にロボット手術を導入、さらに二〇一三年五月からは、回腸U字新膀胱造設術にも適応を拡げ、現在すべての手術操作をロボットで完遂しています。

ロボット手術は、拡大視(肉眼の十倍)、立体視、可動域の広いデバイス、手ぶれ防止機能を有するなど、従来の開放手術、腹腔鏡手術に比べ、より繊細な手術が可能です。

また、開放手術に比べ、圧倒的に出血量が少なく、合併症も少ないことがわかってきています。しかし、最近になって行われるようになってきた手術方法であるため、ロボット手術が生存率の改善に寄与しているのかは、明らかではありません。また、手術手技が煩雑で

あるため、広く普及する術式になるには、まだまだ改善の余地があると思われる。

我々はこれまで、十五例に本術式を行ってきましたが、これは国内随一の症例数です。今後も症例を積み重ねながら術式の改善を行い、患者にとって真に低侵襲で、予後の改善に寄与できるような術式の確立を目指していきたいと考えております。

Dr. John Gusdon Memorial New Investigator Awardを受賞して

黒石市国民健康保険黒石病院 産婦人科医長 船水文乃

平成二十六年六月二日から米国ニューヨーク州ロングビーチで行われた34th Annual Meeting American Society for Reproductive Immunologyにおき、Dr. John Gusdon Memorial New Investigator Awardを受賞しましたので報告致します。本賞は米国生殖免疫学会の創設者の一人であるDr. John Gusdonの名を冠したもので、目覚ましい研究をした若手研究者に与

えられるとされています。今回発表させていただいた演題は「Natural cytotoxicity receptor expression and cytokine production of natural killer cells in peripheral blood and peritoneal fluid of patients with endometriosis」です。子宮内膜症の発症病因は未だ明確ではありませんが、その原因のひとつにNK細胞の関与が考えられており、子宮内膜症患者ではNK細胞活性が低下しているという報告が多くされています。また、NK細胞には活性化受容体と抑制性受容体があり、そのバランスによってNK細胞活性が変化しますが、子宮内膜症で抑制性受容体の発現が増加しているという報告もありま

す。しかし、NK細胞の活性化受容体のひとつであるNatural cytotoxicity receptor(NCR)と子宮内膜症の関連については今まで報告されておられません。これまで弘前大学産科婦人科学教室では、福井淳史講師を中心にNCRと不妊症・不育症の関連について約十八年にわたって研究をしておりましたが、子宮内膜症も不妊原因のひとつでもあることから、今回はNK細胞NCRと子宮内膜症との関連について研究しました。その結果、NCRのひとつであるNKp46の発現が子宮内膜症患者の腹水中NK細胞において低下していることがわかりました。

また、腹水中のNK細胞のサイトカイン産生については、子宮内膜症においてIFN-γとTNF-α産生の増加がみられました。さらに子宮内膜症に対する術前薬物療法の有無で分類した場合、腹水NK細胞中NKp46

発現に変化がみられ、末梢血NK細胞ではNKp30発現に変化がみられました。

この研究は、私が大学院時代から継続してきた研究をまとめたいものであり、私は昨年度で大学院を卒業し、四月から黒石病院勤務となったのですが、発表までの二か月間、黒石での仕事が終わってから大学で発表の準備をするという生活をしておりました。連日夕方から深夜までデータまとめやスライド作成をしてきて、それはなかなか大変ではありましたが、福井先生のご指導のもとで何とかやり遂げることが出来ました。自分の英語力の自信がなかったのですが、原稿をひたすら読んでとにかく発表だけでもしつかり出来るように努めました。当日、発表は午後からでしたので、午前中は自分の部屋に缶詰状態で直前まで練習しました。心臓が爆発しそうなほどの緊張の中で、それでも何とか発表は終えることが出来ました。今回のcompetitionでは、提出されたabstractの中から臨床部門、基礎部門それぞれ三演題が最終候補として選出され発表を行いました。私が選出された臨床部門では私のほかにカナダのクイーンズ大学(オンタリオ州キングストンにあるカナダでは有名な大学です)とアメリカのハーバード大学の方がいました。その方々の発表の仕方を聞いて

いると、日本人には無い「自信」と「余裕」を感じました。日本との文化の違いかもしれませんが(自分の英語の出来なで相手に「自信」と「余裕」を与えたためかもしれないが)、この発表の仕方は見習うべき点があるなと感じました。

受賞の瞬間は、とても現実のこととは思えず、天にも昇る思いでした。言語の違いというハンデは負っていましたが、晴れて賞をいただくことが出来たのは我々弘前大学産科婦人科がこの分野で長年研究を継続してきた成果が認められたことだと思います。この賞の受賞は日本人で三人目であり、このような栄誉ある賞をいただけて大変光栄に思います。この発表に際して多大なるご指導をくださった水沼教授、そしてこれまで研究のご指導をしてくださった福井先生に改めて御礼申し上げます。臨床と研究の両立はなかなか困難ではありますが、これからもより一層努力して継続していきたいと思っています。

2013年ノーベル生理学・医学賞を受賞したRandy Schekman教授から賞を授与されました。



青森放送番組
「命をつなぐ」密着！
弘大医学部附属病院」を見て
医学研究科長 中路重之



青森放送（RAB）が弘前大学病院取材したドキュメンタリー番組「命をつなぐ」密着！弘大医学部附属病院」が、五月三日（土）十六時三十分から三十分間放映されました。私は、そのあとDVDもいただき何回も見させていただきました。

基礎にいと病院の先生方の日常がよくわかりました。そんなこともあって、このドキュメンタリー番組は、私にとって新鮮で大きな驚きを与えてくれました。取材陣の熱く温かい気持ちも感じられた番組でした。胸部心臓血管外科の診療風景をドキュメントした番組です。主役はその先生方で、福田幾夫教授と、若手医師（服部薫医師と川村知紀医師）に焦点が当てられていました。心臓外科の医師の日常が過酷であることはよく知られていますが、しかしそこにある人間の息遣いや日常ドラマはなかなか垣間見ることができません。

など、事細かにしかも要領よく編集されていました。手術は七十五歳男性への大動脈弁狭窄症の手術でした。カメラが手術現場まで入り込んでいました。心臓が一時的に止められ、人工心肺に委ねられ、最後に人工弁が装着されます。そして心拍動の再開、これらすべてが映し出されていきました。稀に見る迫真のロケで、現場への距離感が非常に近く感じられました。番組の全編を通じて伝わってきたのは、福田教授の、厳しさの中にある若手を育てていこうという優しさでした。「どんなに怒られてもこの教授にはついて行きたい」という若手医師の言葉がそれを正直に表していました。

そのほか、若手医師のひたむきさと患者に対する優しさにも感心しました。それを受けた患者さんの安心した表情と発言には癒されました。「病気が良くなつて、有難う」と言われるのを目指すのはもちろんだが、たとえ万が一不幸な結果であつても「有難う」と言われるような関係になりたい。そのためにも良いコミュニケーションをとりつていきたい」「医師は忙しい仕事だけれど、患者さんから直接「有難う」と言ってもらえるので私たちは恵まれている」という服部医師の言葉は、懸命に医療に取り組んでいる人にかきつけられない金言に思えて、胸が熱くなりました。



退職にあたって

法医学講座 黒田直人

番組を見終えて、この番組の意味を考えてみました。本大学病院では、日本最先端の医療が日常的に行われ

ています。病院のスタッフは極めて多忙です。しかし、どの仕事もそうでしょうが、そのことが世に知られる機会が極めて稀です。そのような中で、本番組がもたらしてくれるような、医療現場への一種の親近感とか理解こそが、昨今しばしば問題になる患者・家族と医師・医療スタッフの距離を近くしてくれるの

ではないでしょうか。他の分野の現場や日常を、知ることこそが大切であることをこの番組は教えてくれたような気がします。長崎社長をはじめ、RABの関係者の皆さんのご厚情には心から感謝を申し上げます。そして今後とも、弘前大学の日常を社会に届けていただきたくお願い申し上げます。

本年六月三十日をもって、十七年間余り働かせていただいた法医学講座を退職しました。平成九年五月の赴任以来、諸事にわたり教示下さった弘前大学医学部・医学研究科の皆様のご厚情にに対し、心より厚く御礼申し上げます。弘前大学に着任致しましたのは、弘前さくらまつり真つ盛りの頃でした。引越し荷物が遅れ学園町の公宿に入ることが出来ず、急遽ホテルを探すことになったのですが、どのホテルも旅館も満室で、漸く見つけることの出来た宿泊先は市内にある料理屋さんの二階にあった天窓だけの薄暗い部屋でした。それでも翌日には公宿に入居でき、弘前での生活がスタートしました。赴任した五月のひと月

で、二十二年間の司法解剖を任せて頂き、大変な歓迎を受けたものだと思致しました。さらに、大学院生四名を一度に引き受けることとなったのですが、うち一名は三年生であつたにもかかわらず研究テーマが全く決まっていなかった有様で、限られた時間でできる研究題材を捻り出すのには少々苦労致しましたが、主査形成外科澤田教授、副査高屋神経病理部門教授、橋本皮膚科教授という中で審査は無事に終わり、私が直接指導した大学院生第一号がめでたく誕生したのでした。在任中、研究や教育、更には講座管理運営で力強く手助けをして下さった北武先生のご恩を、私は忘れることが出来ません。大変な思いで研究を地道に続けられた北武先生は、定年間に近くなつても研究に励まれ、腐敗死体における血液型迅速判定法として、消化管粘膜を用いた典型的二重結合反応検査法を開発されました。本講座第二代教授赤石英先生

が発見した血痕の血液型検査法ですが、半世紀近くの時を経て誰にでも実施可能な血液型検査法として生まれ変わり、北先生の去られた現在の弘前大学法医学講座でも日々行われています。法医学講座の貴重な伝統と言えるでしょう。私の在任中には、医学部への学士編入学の開始、法医学解剖室への感染防止型解剖台システムの導入、教員任期制の導入、大学の法人化、大学院の部局化など、大きな変革の波が幾度となく押し寄せて来ましたが、ここまでやって来ることが出来たのは偏に弘前大学医学部・医学研究科の皆様からのお力添えだと確信しています。今後は郷里であり、原発事故という重い十字架を背負うことになった福島ので頑張りたいと思います。皆様本当にありがとうございます。

○平成25年度科研費 申請・内定状況（新規＋継続）

部局名	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付内定額(千円)
医学研究科	192	82	42.7%	136,630
医学部附属病院	117	30	25.6%	43,940
計	309	112	36.2%	180,570

○平成26年度科研費 申請・内定状況（新規＋継続）

部局名	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付内定額(千円)
医学研究科	194	78	40.2%	158,990
医学部附属病院	112	29	25.9%	52,130
計	306	107	35.0%	211,120

○平成25・26年度科研費 研究種目別内定状況（新規＋継続）

研究種目名	医学研究科		医学部附属病院		合計	
	H25	H26	H25	H26	H25	H26
基盤研究（S）	0	0	0	0	0	0
基盤研究（A）	1	1	0	0	1	1
基盤研究（B）	6	5	0	0	6	5
基盤研究（C）	36	35	14	12	50	47
特定領域研究	0	0	0	0	0	0
新学術領域研究	0	1	0	0	0	1
挑戦的萌芽研究	16	12	0	0	16	12
若手研究（S）	0	0	0	0	0	0
若手研究（A）	0	0	0	1	0	1
若手研究（B）	23	24	16	16	39	40
研究活動スタート支援	0	0	0	0	0	0
特別研究促進費	0	0	0	0	0	0
研究成果公開促進費	0	0	0	0	0	0
特別研究員奨励費	0	0	0	0	0	0
合計	82	78	30	29	112	107

※平成26年度研究活動スタート支援（新規課題）については、現在日本学術振興会にて審査中のため、申請件数及び採択件数に含めていない（平成26年7月末時点）

医学研究科および附属病院における平成二十六年度の科学研究費採択状況が公表されました。まずは付表をご覧ください。平成二十五年度と比較すると、申請件数や採択件数ではほぼ横ばいでしたが、採択額総額は約三千万円の増加となりました。これは平成二十五年度の時に、前年度比で五千万円ほど減額していたのを考えると若干持ち直しただけと考えられますが、とりあえず喜ばしいことでした。総じて、医学研究科および附属病院の科研費獲得額は、ここ数年頭打ちの状況が続いています。皆さんは現状に満足しているのでしょうか？科研費新規採択

率の全国平均は、例年二十八％程度です。医学研究科および医学部附属病院の新規採択率はそれぞれ十九・一％、十三・五％です（平成二十六年度の四月の時点のまとめ）。決して、満足できる数字ではありません。また、昨年度から、科研費応募対象者が義務づけられました（大学の科研費申請の基本方針）。必ず全員が申請するように努力しましょう。近年、科研費獲得状況は、大学評価の大きな柱として用いられています。すなわち、良くも悪くも、科研費獲得は大学間の競争です。弘前大学のために、そして自分自身の研究

のために真剣になって科研費獲得を考えなければいけません。科研費獲得向上対策として、医学研究科では科研費アドバイザー制度を毎年実施しています。また、大学全体でも科研費がA評価で不採択になった申請者への支援の他、昨年度からは上位種目にチャレンジする人に対する支援も始めました。是非、このような支援策を有効に利用していただければと思います。例年、医学部における科研費のしめきりは十月の半ばです。この号が出る頃にはもう募集が始まっていることと思いますが、今一度気合いを入れ直して頑張りましょう。

採択額で増額も、

来年度にはさらなる飛躍を！

分子生体防衛学講座 教授 伊東 健

平成26年度科学研究費補助金採択状況

第98回 弘前医学公総会

小児科学講座 教授 伊藤悦朗

平成二十六年六月七日（土曜日）と八日（日曜日）の二日間にわたり、八戸市の八戸グランドホテルにおいて、八戸市医師会高木伸也会長を総会長として第九十八回弘前医学公総会が開催されました。会に先立ち、中路重之弘前医学会長を議長として評議員会が行われ、予定されていた諸議案は滞りなく進行しました。評議員会では、次期開催地として大館市（平成二十七年六月十三日開催予定）が選ばれました。評議員会から提出された議案は、高木総会長を議長とする総会で承認されました。

お、会員等の参加数は、二日間で六十九名でした。六月八日には、十四題の一般演題の発表があり、いずれも活発な討論が行われました。この一般演題からは優秀発表を選ぶことが恒例になっており、一般演題終了後村上先生を選考委員長とする四名の審査員による選考委員会が開催されました。厳正な審査の後、いづれも優れた演題の中から「血液検体からの*Bacillus cereus*の分離状況とタオルの取扱いに関する検討」と

題する口演を行った弘前大学臨床検査医学講座の山本絢子先生が受賞されました。また、平成二十五年度弘前医学公優秀論文賞には、弘前医学に掲載された対象論文の中から、弘前大学病理生命科学講座の高杉かおり先生の論文「Histopathological Characteristics of Laterally Spreading Tumor (LST) Type Early Colorectal Cancer (弘前医学第六十四巻 第二十四号掲載)」が選考されたことが、会計幹事の若林孝一教授より報告されました。

末筆になりますが、このような会を企画、主催、運営していただきました八戸医師会の皆様と演題をご発表下さった諸先生に対し、心から御礼申し上げます。

弘前医学会 学会賞を受賞して

附属病院検査部

助手 山本絢子

このたびは「第九十八回弘前医学会優秀発表賞」をいただき、ありがとうございます。選考委員の諸先生方ならびに関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

今回受賞した演題は「血液検体からの*Bacillus cereus*の分離状況とタオルの取扱いに関する検討」です。*Bacillus cereus*は環境に広く存在する菌で、血液培養から検出された場合は、多くの場合は検体採取時の汚染と判定され、その原因としてタオルなどの汚染リネンが指摘されています。しかし、抵抗力の減弱した患者では真の感染症に至ることもあります。当院でも血液培養で*B. cereus*陽性例が増加した事例があり、

同菌の血液培養陽性率とタオル管理の関連を探るべく、タオル汚染や、他院での同菌分離状況について検討致しました。*B. cereus*が血液培養検体から分離された場合、約95%は偽陽性、つまり検体汚染と判定されます。しかし、例えば偽陽性であっても、偽陽性検体の増加は感染症診療の精度の低下につながります。診断・治療のみならず医療経済面でも問題となります。感染制御上は再使用タオルからデイスポタオルへの変更が安全かつ確実です。当院でもデイスポタオルへの変更によって、陽性検体は劇的に減少しました。清拭は患者ケアの中では基本的かつ重要な手技です。安全

AO入試スクリーニングが開催される

― 県内高等学校進路指導担当教諭との懇談会も含めて ―

入試専門委員長

鬼島

宏

七月二十二日に行われた弘前大学入学者選抜要項の記者発表を受け、翌日にはAO入試五名増（定員四十七名）が新聞に掲載されました。このように、平成二十一年度からスタートした医学科AO入試（アドミッション・オフィス入試）は、入試形態として十分理解されているのみならず、大きな期待を担っています。今年度は（百二十六名）とほぼ同様の参加者であり、AO入試がすっかり定着したことを示しているようです。講義は三コマ組まれました。最初に中路重之医学部長から講義「弘前大学医学部の姿勢と将来性」が行われ、弘前大学医学部の概要と医学部学生・医師・医学研究者として求められる人間像についてお話いただきました。次に藤哲附属病院長による講義「躍進を続ける弘前大学医学部附属病院」では、最近の先端医療の紹介を交えながら附属病院のすばらしさについてお話いただきました。さらに入試専門委員長による講義「弘前大学AO入試選抜の概要及び弘前大学医学部医学科の教育の概要」ではAO入試の資格、選抜方法、医学教育六年間が語られ、参加者はいずれの講義も熱心に聴き入っていました。

第一回目は五月十日（土）午後一時から三時半まで、基礎大講堂で行いました。高校三年生を中心に百二名（保護者・高校教諭二十八名を含む）の参加がありました。昨年度（百二十六名）とほぼ同様の参加者であり、AO入試がすっかり定着したことを示しているようです。講義は三コマ組まれました。最初に中路重之医学部長から講義「弘前大学医学部の姿勢と将来性」が行われ、弘前大学医学部の概要と医学部学生・医師・医学研究者として求められる人間像についてお話いただきました。次に藤哲附属病院長による講義「躍進を続ける弘前大学医学部附属病院」では、最近の先端医療の紹介を交えながら附属病院のすばらしさについてお話いただきました。さらに入試専門委員長による講義「弘前大学AO入試選抜の概要及び弘前大学医学部医学科の教育の概要」ではAO入試の資格、選抜方法、医学教育六年間が語られ、参加者はいずれの講義も熱心に聴き入っていました。



会場の様子

説明がありました。最後に入試専門委員長による講義「弘前大学AO入試選抜の概要」が行われました。講義終了後、質疑応答が行われ、本年度のAO入試スクリーニングの日程が終了しました。程無く十月となり、平成二十七年AO入試本番がスタートします。さて六月五日（水）には、医学科入試の実施に対し有効な意見交換をするために、青森国際ホテルにおいて、中路医学部長、入試専門委員長をはじめ七名、県内高校側は十九校の進路指導担当の先生方が出席しました。中路医学部長のあいさつの後、入試専門委員長から平成二十六年の入試結果と平成二十七年入試に向けての説明を行いました。その後、大学と高校間の質疑応答や意見交換が行われ、一時間半の懇談会が終了しました。質疑応答はAO入試が中心であり、生徒はもちろん、高校関係者や保護者もきわめて高い関心が寄せられていることを改めて実感しました。

最後に、二回のスクリーニングの準備や当日の施行に多大な貢献をいただいた先生方および学務グループに深く感謝いたします。



市民公開講座での講演をする村上教授

例が増加した事例があり、



左から高木伸也八戸市医師会長、高杉かおり先生、山本絢子先生、中路重之弘前医学会長

第二回目のスクリーニングは八月七日（木）に行われました。例年八月八日に行われるオープンキャンパスと連

続して開催されるため、二日間参加された方も多かったです。今回の参加者は九十三名で、第二回目スクリーニングとしては盛況な参加となりました（昨年七十五名、一昨年八十五名）。第二回目スクリーニングは四コマの講義が組まれました。最初に中路重之医学部長から講義「弘前大学医学部の姿勢と将来性」、次いで佐藤敬学長による講義「北日本の医学を担う諸君へ」と題した講義が行われました。佐藤学長より、地域医療を担いつつ、世界的視野に立つスケールの大きな医療人へと飛翔してほしいとの期待が熱く語られ、多くの参加者が感銘を受けたことに疑いありません。さらに若林孝一学務委員長より講義「弘前大学医学部医学科の教育」の



弘前大学 成績優秀学生表彰

学務委員長 若林孝一
(脳神経病理学講座 教授)



平成26年度 弘前大学成績優秀学生

医学部医学科2年	石山 真美
医学部医学科3年	岩井 美穂
医学部医学科4年	奥瀬 諒
医学部医学科5年	久保田 美怜
医学部医学科6年	松崎 敦子
医学研究科2年	工藤 直美

または春季休業期間にオー
克蘭ド工科大学（ニュー
ジランド）で二週間の語
学研修に参加することがで
きます（滞在費、渡航費は
大学が負担）。学生諸君に
はこの表彰を励みにさらな
る発展を期待します。

学士編入学（二年次後期）試験が終わる

医学科入試専門委員長 鬼島 宏
(病理生命科学講座 教授)

平成二十六年十月入学予
定の二年次後期学士編入学
生は、弘前大学医学部医学
科に学士編入学制度が導入
されてから十三期生に当た
り、三年次前期から二年次
後期へと編入学の時期が変
更されてから五年目となり
ます。平成二十六年年度編入
試は、六月一日に第一次選
抜試験が行われ、合格者百
名に対して六月二十八日、
二十九日の両日に第二次選
抜試験が行われ、七月二十
三日に最終合格者二十名の
発表が行われました。

十八名、女性二名でした（昨
年度は女性四名）。年齢別
では二十歳代が十六名、三
十歳代が四名、平均年齢が
二十七・三歳であり、昨年
の合格者より平均年齢で
〇・八歳低くなりました。
学部別では、薬学系六名、
理工系四名、医療系二名で
あり、文系（経済、法学、
国際、教育）出身者も六名
おりました。

昨年度から今年度にか

け、AO入試、前期日程入
試、二年次後期学士編入学
生入学選抜が行われ、一連
の選抜作業の準備や実施に
多くの教職員のご協力をい
ただき、つつがなく終える
ことが出来たことに心から
感謝しています。またすぐ
AO入試選抜が始まりま
す。さらに今年度は、二年
次前期に学士編入が前倒し
となるため、年末には、学
士編入学生入学選抜が行わ
れます。引き続き多くの教
員の方々と学務担当をはじ
めとした事務職員の方々に
入試業務をお願いしなけれ
ばなりません。どうぞよろ
しくお願いいたします。

平成26年度 実験動物慰霊式

附属動物実験施設長 上野 伸哉
(脳神経生理学講座 教授)



平成二十六年
度実験動物慰霊
式が六月十二日
(木)午後一時三十
分から、動物慰
霊碑前において
開催されました。
あいにくの
雨にもかかわらず、
多くの方に
参加いただきあ
りがとうござい
ました。その後
に山形大学医学
部 大和田一雄
先生より「実験
動物福祉の基本
原則」の演題に
て記念講演を開
催しました。動物福祉にお
けると同時に更なる実践を
お願いいたします。最後に本慰
霊式の進行・計画にご協力
いただいた関係各位および
式へ出席した方々にこの場
をかりて深謝いたします。

出身学部別合格者数

	文系	理工系	農学系	歯学系	薬学系	獣医系	医療系	その他 (外国等)
H22年度	1	9	2	1	3	0	2	2
H23年度	4	5	5	0	4	0	2	0
H24年度	0	7	1	0	9	0	2	1
H25年度	3	8	1	0	4	0	2	2
H26年度	6	4	0	0	6	1	2	1

学部卒後経過年数別合格者数

	在学中	1年	2年	3年	4年	5年 以上
H22年度	0	4	4	3	1	8
H23年度	0	3	3	3	4	7
H24年度	0	1	2	2	5	10
H25年度	0	1	4	0	2	13
H26年度	0	6	4	0	1	9

男女別合格者数

	男	女
H22年度	14	6
H23年度	16	4
H24年度	20	0
H25年度	16	4
H26年度	18	2

入学時年齢別合格者数

	22～25歳	26～30歳	30～35歳	36歳以上	平均年齢
H22年度	10	7	3	0	26.5
H23年度	8	9	1	2	27.1
H24年度	2	13	5	0	28.8
H25年度	7	7	5	1	28.1
H26年度	7	11	1	1	27.3

大学院修了合格者数

	修士	博士	合計
H22年度	5	1	6
H23年度	6	0	6
H24年度	11	2	13
H25年度	9	1	10
H26年度	3	0	3

H26年度 出身大学別合格者数

3名：慶應義塾大学（大学院を含む）
2名：東京大学
1名：北海道大学、上智大学、東北薬科大学、東京薬科大学、明治薬科大学、名古屋大学、早稲田大学、東京学芸大学、
津田塾大学、弘前大学、昭和薬科大学、東邦大学、関西学院大学、中央大学、オレゴン州立大学（順不同）



膵癌に対するロボット支援 膵体尾部切除術

消化器外科学講座 教授 袴田 健一



消化器外科学講座では、二〇一一年十二月から膵癌に対するロボット支援手術を実施しております。膵に対するロボット支援手術導入は国内二施設目、膵癌を対象とする臨床研究としての導入は日本では初めてです。



です。既に標準治療となり、我が国でも保険診療がいち早く認められました。海外では心臓、肺、耳、鼻、口腔、頭頸部、泌尿器、生殖器、消化管、肝胆膵に対しても導入が試みられ、評価が行われていますが、日本では薬療法や保険診療の壁に阻まれ、なかなか導入できない状態が続いています。

私達が膵癌を対象としてロボット支援手術を導入したのは、大血管に取り囲まれて体内深部に存在する膵臓の手術、特に精緻な切除やリンパ節郭清が求められる膵癌の手術では、ロボット支援手術の特性が最も発揮されうると考えたからです。膵癌は消化器癌の中では最も治療が困難で、予後不良な癌腫ですが、抗癌剤治療の発達で、切除困難病

変を切除可能な状態にまで縮小できる機会も増えてきました。これにロボット支援下の精緻な低侵襲手術を組み合わせることで、治療成績を向上させることが導入のコンセプトです。最近、米国から膵癌に対するロボット支援膵体尾部切除術の有効性が報告され、国内の施設でも導入を検討しているところがあります。

私達が非常に早い時期に、膵癌に対するロボット支援手術を導入出来たのは、泌尿器学講座や産科婦人科学講座のロボット支援手術導入への熱心な取り組みはもとより、経済的サポートも含めて、新規治療導入へのチャレンジに対する弘前大学全体のご理解があつての賜物と存じます。この場をお借りして感謝申し上げます。

「高校生外科手術体験セミナーin八戸」に参加して

形成外科学講座 教授 漆 館 聡 志



去る七月十九日土曜日、八戸市立市民病院において「高校生外科手術体験セミナーin八戸」が開催されました。本セミナーは次の世代の医療を担う高校生達に医学や医療に興味を持ってもらい、医師を目指してほしいとの思いから消化器外科科学講座ならびに県内医療機関の外科医が中心となつて開催されている企画であり、今回で第七回目を迎えました。私は今回初めて参加させていただきマイクロナージャリーのブースを担当いたしました。八戸での開催は五年ぶりとなつた今回は、八戸地区の高校生五十六名が参加してくれました。セミナーを支えるスタッフは、医師・研修医五十名、医学生、協力企業のスタッフを含めると総勢七十名超となりました。

まず袴田教授より開会のご挨拶をいただきセミナーがスタートしました。緊張気味の高校生達でしたが「外科医は怖いイメージがあるかも知れないけれど、実は意外と優しいから、何でも聞いてください」との優しいお言葉に緊張がほぐれた様子でした。

次に外科医の基本、清潔操作とガウン、マスクの着用について学びました。その後、超音波メス（超音波凝固切開装置とベッセルシーリングシステムで鶏肉、油揚げを切離します）④手術シミュレーター（リアルなシミュレーターを用いて腹腔鏡下胆嚢摘出術を体験します）⑤マイクロナージャリー（顕微鏡を用いて直径約2mmの血管を吻合します）⑥スリーチャリング（糸結びの練習後、腹壁縫合を体験します）⑦自動吻合器・腸管吻合コーナ（スポンジ製腸管の縫いと自動吻合器を体験します）の七つです。各ブースともたくさんスタッフが熱心に指導にあたりました。高校生達は

用する鉗子を両手で操作してみます）③超音波メスコーナ（超音波凝固切開装置とベッセルシーリングシステムで鶏肉、油揚げを切離します）④手術シミュレーター（リアルなシミュレーターを用いて腹腔鏡下胆嚢摘出術を体験します）⑤マイクロナージャリー（顕微鏡を用いて直径約2mmの血管を吻合します）⑥スリーチャリング（糸結びの練習後、腹壁縫合を体験します）⑦自動吻合器・腸管吻合コーナ（スポンジ製腸管の縫いと自動吻合器を体験します）の七つです。各ブースともたくさんスタッフが熱心に指導にあたりました。高校生達は

徐々にリラックスし、初めて体験する外科手術に目を輝かせていました。各ブースとも最初は慣れない手つきでしたが徐々に慣れてくるにつれ、将来の外科医の片鱗を見せてくれる高校生があらわれました。

休憩時間は八戸市立市民病院の鳩山先生から外科医の仕事、研修医の生活についてのレクチャーをいただき、外科医がより一層身近に感じられたのではないかと思います。

その後手術体験が再開されると、前半以上にリラックスし高校生達もスタッフに話しかけやすくなったようです。笑顔もたくさん見られるようになり、自動吻合器の合言葉「ファイヤー！」もより響き渡るようになりました。「意外と外科医は優しい」ことがわかってもらえたのではないかと思います。全てのコースが終了したのは開会から三時間経過していましたが、あっという間の三時間でした。新しいことに真剣に取り組む高校生達の姿はさすがしく、このセミナーを通して逆に私たちスタッフも高校生から元気をもらった気がします。

全コースが終了したところで参加者全員に弘前大学医学部の紋章入り英語表記の修了証書が授与されました。袴田教授と私で全参加



弘前大学 オープンキャンパスが開催される

入試専門委員長 **鬼島 宏**
(病理生命科学講座 教授)

八月八日(金)に弘前大学オープンキャンパスが開催され、ここ数年は五百名を超える参加者があり会場の基礎大講堂は溢れんばかりの大盛況でした(今年五百三十四名、昨年五百十四名)。

午前十時からプログラムが開始され、まずは中路重之医学部長から、オープンキャンパスへの参加の歓迎

と弘前大学医学部医学科への誘いの挨拶がありました。次いで、若林孝一学務委員長から弘前大学医学部医学科の特徴ある研究・教育についての紹介・説明が行われました。引き続き総合医学教育学講座の加藤博之教授から「超高齢化時代の医療と総合診療専門医」と題した模擬講義が行

ていました。その後、一転、ラックスした「学生コーナー」が始まりました。医学科三年次・五年次の学生諸君が「学生生活楽しみ中」と題し、楽しく、かつためになる学生生活を語ってくれました。

昼食後、青森県健康福祉部から担当の方に来ていただき、「医学修学資金貸与制度について」についてお

弘前大学 後援会のご案内

会長 石戸谷 忻 一

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

なお、入会方法等の詳細については、弘前大学
総務部広報・国際課 (Tel：0172-39-3012、E-mail：
jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp) までご連絡いた
だくか、弘前大学後援会ホームページ ([http://www.
hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html](http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html)) をご覧ください。

「学生コーナー」は今年も学生自治会に協力を求め、受付時の誘導、施設見学の付き添いも担当してもらい、参加した生徒と医学科学生のふれあいの時間が増しました。最後に、今回のオープンキャンパスの準備や当日の施行に多大な貢献をいただいた先生方、学生諸君、学務グループに、深く感謝いたします。

ましたが、例年の薬剤部・検査部・放射線部の三部門は、二十名一グループとして一部門二グループずつ計六グループで行いました。さらに、これら施設見学に加えて昨年度に引き続き、医学科実習室において臨床実習シミュレーション・診察モデルを体験してもらうコーナーも設けました。このコーナーが大変な人気で、実習室が溢れんばかりに高校生の皆さんが集まっていただき、活気ある実習体験となりました。これらの施設見学・実習体験と並行して、在校生と見学者との意見交換会が行われ、医学科のオープンキャンパスが閉幕しました。今年も参加者は、県内、東北各地のみならず、全国から参加者が集まりました。

OPEN CAMPUS

弘前大学

未来を拓げる!!

オープンキャンパス
への参加方法

事前申込みは不要です。

全体企画

- 個人相談 (個別相談、個別説明、個別体験)
- キャンパスツアー
- 学食体験

学部企画

- 模擬講義
- 体験学習
- 在学生との交流
- なんでも相談コーナー
- 研究室訪問 etc...

2014 8/8 Fri

10:00~15:00
(受付 9:30~)





※本学は、環境省の指定校に選定されています。
 ※オープンキャンパスは、各学部のオープンキャンパスと併行して実施されます。
 ※オープンキャンパスは、各学部のオープンキャンパスと併行して実施されます。
 ※本学は、環境省の指定校に選定されています。

お問い合わせ先 弘前大学学務課入試課

TEL: 019-651-2222 FAX: 019-651-2223

http://www.hirosaki-u.ac.jp/

〒030-8585 弘前市青森町1-1

TEL: 019-651-2222 FAX: 019-651-2223

http://www.hirosaki-u.ac.jp/

青森
あずまし
温泉紀行 ②

鬼島 宏
(病理生命科学講座・教授)

松崎温泉
新屋温泉
柏木温泉
猿賀温泉
碓ヶ関温泉

ホームページにもある通り数多くの温泉があるため、他の珠玉の湯も別の機会に記したいと思います。

次回は、弘前市出身の石坂洋二郎が編者として執筆し、秋田の著名な版画家勝平特之が多くの挿絵を加えた名著『東北温泉風土記』（昭和十五年初版）に纏わる湯を紹介いたします。

第二回目は、毎年六月十月に「ひらか和入浴フリー」が行われる平川市の五湯を巡ります。まずは、旧平賀町です。**松崎温泉**（第四湯：平川市松崎・第三水曜定休二十二時迄）は、ナトリウム・塩化物泉が豊富に溢れ出る湯です。湯船は、熱湯と温湯が下でつながる銭湯に特徴的な形式で、熱湯口から注がれる塩

十分迄）が良い湯です。薄黄透明のアルカリ単純泉で、露天風呂もあります。青森県では岩木山神社（津軽国新一宮）とともに別表神社となっている猿賀神社（旧県社）の鳥居から境内に入り、猿賀公園池前の公共施設にあることも特筆でしょう。

味の温泉は、質の高さを感じます。弘前・平川市境に近く、スタッフが明るく迎えてくれるため、元氣回復の湯としてしばしば訪れています。新屋

旧碓ヶ関村の名は、脇往還 羽州街道に設けられた関所に由来します。碓ヶ関温泉 津軽関の庄（第八湯・平

旧尾上町では、**猿賀温泉**
さるか荘（第七湯）平川市猿
賀…第三水曜定休二十一時三



学生だより



学生だより 弘前大学に入学して

弘前大学に入学して

医学科一年 関口 泰 征

こんにちは。医学科一年の関口泰征と申します。この文章を読んでいるあなた、どうか真剣に読まないでください。けっこう恥ずかしいです。弘前大学に入学してもうすぐ四か月になります。今までのことを少し振り返ってみました。合格が決まった当日は、僕の生きてきたこの二十年間の中でも、最高にうれしい一日でした。僕は二年間浪人していて、弘前大学を受験したのは今年で三回目です。今年も試験は思うようにできず、発表当日も僕は布団の中でうずくまっていました。今までの努力はすべて無駄だったのかなあ、自分はこのままニートになってしまうのかなあ、などいろいろなことを考えました。が、十時になってパソコンの合格発表を見ると、なぜか自分の番号があったのです。あれ、おかしいな、見間違いか？いや、あつてな。もしかしてこれが噂のドッキリというやつなのか？そうかも。合格通知が来て、ようやく信じました。どうやらガチで受かったらしい！そのときの喜びは言葉じゃ言い表せませ

ん。やっと夢のスタート地点に立てたのだという思いでいっぱいでした。親にも予備校の先生にも本当に感謝しています。僕が今の文章を書いているのは本当にミラクルなんです。そんなわけで無事合格できたので、次は大学ライフについて書こうと思います。週の授業の中で僕が一番好きなのは、基礎人体科学入門の授業です。この授業では病院の方に移動して、実際の患者の臓器やそこにできた癌を見ながら、臓器の壁構造や癌の浸潤の度合いなどについて詳しく教えてもらいました。僕は以前から、自分が今こうして生きていることがすごく神秘的なことだと感じていて、体内で起こっている、細胞や臓器の連携による生命維持のしくみについてもっと詳しく知りたいと思っていました。だから、この授業で初めて人間の臓器を見たときは、本当に新鮮な気持ちになって、すごく感動しました。自分が医学部に来たのだということを改めて実感しました。今やっている勉強は将来自分が、少しでも多くの患者さんを手助けで

きるような医師になるためにやっているのだということとを、六年間忘れずにがんばっていきたいと思います。部活動では、僕は医学部ソフトテニス部に入りました。テニスは今までやったことがなくて、しかも男子で初心者僕しかいないので、なかなか厳しいです。練習はいつも居残りだし、いっしょにペアを組んで一年生にはいつも本当に申し訳なく思っています。古沢くん、いつもありがとうございます。でも、苦しい時もあるけれど、テニスはとても楽しいです。特にスマッシュが決まったときはめちゃめちゃうれいす。でも試合に勝ったときはもっともつとうれいす。今まで一回くらいしか勝ったことないんですけど(笑)。先輩たちいわく、もっと上達して、自分の打ちたい場所に打ちたい球を打てるようになること、テニスの本当の楽しさがわかるようになるそうです。たくさん練習して、毎日少しずつでも上達できるようにがんばっています。勉強も部活もとても大事なことです。が、僕が大学に入ってもっとも重要だと思ったのは人づきあいです。高校と違ってクラスや班みたいなものがあり、新しい生活に慣れるのに必死だった私は、かつて弘前を訪れたことなどすっかり忘れていた。部活を決めたり、同期や先輩方の名前を覚えたり、弘前の道や店を頭に入れたりなどして

がいいと思います。が、残念ながら、僕はかなりのコミュニケーション障なんです。女の子の前だと全然話せません。将来医師になることを考えても、致命的すぎます。ということと、僕の今年一年の目標は脱コミュニケーション障に決定しました。勇気を振りしほっている人々に話しかけて

弘前への出会い

医学科一年 藤野 聖 人

中学校三年の秋、私は人生で初めて弘前を訪れた。私の母校は東京にあり、中学の修学旅行では東北を訪れるのが恒例となっていた。私も当時、青森や秋田、岩手の各地を五日間かけてめぐり、東北の自然・歴史・文化を学んだ。その中で自由行動の行き先として、私のグループは弘前を選んだのだった。弘前市内をひと通り観光し、歩き回った後、十五歳の私はこの土地をどう感じただろうか。「人は少ないが、意外に栄えていて、なおかつ歴史を感じさせる城下町。」そんな第一印象を私は弘前に持っていたような気がする。そしてはつきりと覚えていることは、リングが美味しかったことだ。

あれから何年もの月日がたった。野球に没頭していた高校時代、決して無駄ではなかった浪人生活を経て、弘前大学に入学した。初めての一人暮らしが始まり、新しい生活に慣れるのに必死だった私は、かつて弘前を訪れたことなどすっかり忘れていた。部活を決めたり、同期や先輩方の名前を覚えたり、弘前の道や店を頭に入れたりなどして

みようと思います。六年間は長いようで短いのもしれません。まだ一年目ではありますが、一日一日を大切に生きて、卒業するとき、とても楽しくて有意義な六年間だったな、と思えるような大学生活を送りたいです。

を成長させてくれるのは、個性ある仲間たちとの交流だ。年齢や出身地はバラバラだが、立派な医療者になるという共通の夢を追い、弘前という地で切磋琢磨する私の仲間たち。毎日新しい刺激を与えてくれる彼らを、今後も大切にしていこうと心に決めた。

初夏の季節、弘前の街並みを巡っているうちに、何度か不思議な感慨が私の胸中を去来した。かつてこの地を訪れたことがふと思いだされたのだ。そこに数年後、こういう形で住むことになるのではあのかは想像もしなかった。どうして弘前なのだろうか。何の巡り会わせだろうか。もちろんその答えなど出やしない。しかし私はこの出会いに感謝し続けようと思う。この土地、そしてこの大学を好きになれそうだ。弘前に来てよかった。

学生だより BSLJUNIOR

BSLJUNIOR

医学科五年 奥 口 聡 美

五年生になり、大学病院での実習が始まりました。四年まで、教室で座って授業を受ける生活をしてきたので、全く違う生活スタイルになったと感じています。二週間を一クールとして、あらゆる科を回らせていただいています。ここでは、私が実習を行っていく中で気付いたことについて、述べたいと思います。まず、実習を行っていくにあたり、絶対になくは

ならないものは、体力だと感じています。座って講義を聞いていた去年までとは異なり、一日のほとんどを立てて過ごしていて、頭よりも先に足が疲れるようになります。実習が始まった四月頃よりは慣れてきたものの、まだまだ私達は先生方の体力にはついていくことができません。外来診療や手術を朝早くから夜遅くまで毎日こなし、患者さ

一つも見せない先生方の姿から、自己管理能力の大切さを学びました。

また、班員の存在が、自分にとってとても大きなものとなりました。医療現場においては、個人ではなくチームで行動することが要求されます。一年間を通して同じメンバーと過ごすこの実習生活は、チームとしての動き方を学ぶ上でかけがえのないとても貴重な経験になると考えています。私の班のメンバーは皆個性的で楽しく、昼食も六人一緒にいることがほとんどです。また、チームとして統率された動きが取れるように、集合時間の変更など、実習の情報を共有するようにしています。



座学との最も大きな違いは、患者さんが近くにいること、そして自分の発言、行動が全て直接目の前にいる患者さんに届くということです。まだ私達は医療行為そのものに携わることができませんが、当然自分の話した内容には、責任が伴います。そして、四年までに学んできたことは全て現場に結びついていることを実感しました。

これから新しい知識の習得に励むとともに、班のメンバーと協力し合い、医師となるための第一歩であるこの実習を通じて、自分自身を大きく成長させたいと思っています。

BSLJUNIOR

医学科五年 藤 田 博 陽

BSLと聞いて、臨床の場に立って勉強に励まなければとか、実際の患者さんをお世話になった先生方をはじめ、たくさんの方と出会う、またたくさんの方と出会う。二週間が経つと診療科が変わり、また新しい先生方と新しい患者さんとお出会うのだ。特に

とである。ある診療科を回ると、そこでは系統講義でお世話になった先生方をはじめ、たくさんの方と出会う、またたくさんの方と出会う。二週間が経つと診療科が変わり、また新しい先生方と新しい患者さんとお出会うのだ。特に(次ページへ続く)

(前ページより)

BSL は以前 SGT (Small Group Teaching) と呼ばれていたように、少人数のグループにいろんな先生方がついて指導してくださるので、先生方とは今までよりも密接にかかわる。その分楽しいことも多いし、もちろん厳しいことを言われることもある。今まで知らなかった先生方の意外な一面を知ることもあるし、先生からよい刺激を受けることも多い。また実習は一人の担当患者さんが割り振られ、その患者さんとは特に密接にコミュニケーションをとる。患者さんの病気はもちろんのこと、患者さんの思いや心の内を知ること

からは医学のみならず、医師として重要な人間的な要素を学ぶことが多かった。このように、短い二週間の間にも自分にとって貴重な出会いというものが数多くあった。人との関わりがいかに関に影響を与えるを実感している。

余談であるが、私にとって BSL では人だけでなく初めて出会う医学知識も多い。今まで系統講義で習った知識を定着・応用させるために、先生方から質問を受けることもあるが、情けないことに私は確信をもつて答えたことがほとんどない。わからない質問をもらったら、初めましてと挨拶してメモ帳を取り出す日々を送っている。コミュニケーションはもちろん重要だが、当たり前のよう医学知識も重要なのである。系統講義をもっと大事にすればよかったと反省している。

BSL が始まって四ヶ月が経とうとしています。今までの四年間とは一転して、朝から晩まで病院内を駆けずり回る毎日です。これまでの四年間で、なんとか試験は乗り越えてきたものの、それが知識としてきちんと定着していないのは自分でもわかっていたので、患者さんを目の前にすることに對して不安でいっぱいでした。ただ、いざ BSL が始まると、不安はむしろ今でもありますが、それ以上にやりがいを感じました。机上の勉強だとうしても想像のしにくいものがありますが、実際に自分でやってみる・自分の目で見てみることによってさらに理解がしやすくなりました。現段階では学生という立場ではやれることは限られていますが、患者さん

BSL だより

医学科五年 谷 中 亜由美

BSL が始まって四ヶ月が経とうとしています。今までの四年間とは一転して、朝から晩まで病院内を駆けずり回る毎日です。これまでの四年間で、なんとか試験は乗り越えてきたものの、それが知識としてきちんと定着していないのは自分でもわかっていたので、患者さんを目の前にすることに對して不安でいっぱいでした。ただ、いざ BSL が始まると、不安はむしろ今でもありますが、それ以上にやりがいを感じました。机上の勉強だとうしても想像のしにくいものがありますが、実際に自分でやってみる・自分の目で見てみることによってさらに理解がしやすくなりました。現段階では学生という立場ではやれることは限られていますが、患者さん

を目の前にして、患者さんの疾患について無知であることはとても失礼に当たると思います。そのため、自分の知識の無さに悔し涙をこぼすこともしばしばありました。

今までまわってきた中で、とある先生に言われた印象的な言葉がありました。「今の君たちの知識はまだ、二次元の段階。三次元の段階になって初めて『使える知識』になる」というものです。知識として単語や言葉を知っていてもそれがどのタイミングでどの場所で作られるのかを知らなければ、使えない知識であるというものです。二次元の知識を三次元の知識にレベルアップさせるのが BSL であり、この一年間、いや今後一生をかけてレベルアップさせていくものが多い。だがどの科でも共通して言えることが少なくとも一つはある。当て推量だが、これは実習期間を終えて振り返った際に自分がどう思うか、何が身についたかに大きく関わってくるだろう。

それはすなわち、BSL の還元先は一旦私たち S D s・Student Doctors に向けられているということだ。私たちはそれを受けて未来の「医療」を担っていくこととなる。つまり Student Doctors はいずれ「立派な Doctors」になるのだ。これを踏まえ、我々 S D s は BSL の期間中どう過ごしたら良いのだろうか。Duty

BSL に思いを馳せて

医学科五年 小山 元 氣

以下に述べるのは BSL (Bed Side Learning) が始まって約三ヶ月経った頃の考えである。講義室に缶詰だったあの頃と異なる生活サイクルに放り込まれて以来、あつという間に月日が流れていった。講義では学べないことがたくさん詰まった実習。もちろん講義で学んだこともふんだんに盛り込まれている。講義なんかより数倍、いや私に言わせると例えば数十倍は楽しい。加えて、講義より数倍は厳しい。何となく Patients や Co-Medical Staffs のこる

実際の「医療」の現場である病棟は、学生として幾分か自由に「医学」を習える講義室と大きく異なる場であるからだ。その分、「医療」を担う一員としての心構えがある程度必要となる。

既に回ってきた科にも言えるが、どの科もそれぞれ色が異なる。少し閉鎖的な雰囲気科や、活き活きとして明るい科、Bed Side にほとんどいけない科や、Patients と接する機会が多い科など、各々独特な雰囲気がある。学ぶ内容も異な

のだと思います。ただ、そのレベルアップは決して一人でできるものではありません。現在六人一班で各診療科をローテーションしてありますが、お互いに助け合い、教え教えられしながら人ではわからないことも、班員がいることで助けたりするので自分の足りないところがわかりますしとてもわかりやすく解釈できます。班員に頼りきりでも自分のためにはならないので、勉強しようという気になり、自分を高めるのにとっても良い環境にあると思います。これからの実習でも、この環境を十分に活用して、自分の知識を「使える知識」

院生だより 研究室紹介

研究室紹介

生体構造医科学講座 大学院生 千葉 智 博

私は二〇一三年十月から医学研究科生体構造医科学講座に在籍しています。私は修士まで体育科学を専攻していたため、人体の構造や組織の成り立ちについて以前から興味を持っていました。そのため、博士課程入学を考えるにあたり解剖学について深く学びたいと思い、当講座を選びました。

当講座は解剖学実習を担当しているため、私も実習に参加しながら人体の構造や形態について学んでいます。人体についてはこれまである程度理解していると思っていました。実際にご遺体に向き合いながら得

られる知識は、参考書等に掲載されている情報とは異なるため、当初、戸惑うことが多々ありました。しかし、その都度構造をよく観察し組織と参考書を比べながら、「どうしてそうなったのか」などと考えることで、生体の構造について理解を深めています。このよう貴重な機会をいただけることに深く感謝するとともに、新たな知識を得る喜びを感じながら日々研究を進めています。

さて、本学の解剖学は、肉眼解剖を生体構造医科学講座が、組織解剖と神経解

剖を神経解剖・細胞組織学講座が担当しています。そしてその二講座を下田教授が兼任することによりミクロからマクロまで、網羅的で流動性に富んだ教育・研究が行われています。私も所属は生体構造医科学講座ですが、二講座を行き来しながら先生方に指導を受けています。二講座共通の研究の中心テーマは「リンパ管」です。リンパ管系は体液の恒常性維持や免疫応答、脂質代謝に中心的役割を果たす重要な脈管系ですが、近年ではがん転移、リンパ浮腫、炎症反応などの病態にも深く関与していることが明らかとなり、大変注目を集めています。当講座では主に、リンパ管の機能構造と形成メカニズム、リンパ管の発生・新生メカニズム、がんリンパ管新生と転移機構、リンパ浮腫治療などに関する研究に取り組んでいます。その中で私が取り組んでいる研究テーマは「ヒトにおける浅部、深部リンパ管の三次元的分布及び、形態学からみた集合リンパ管の構造につい

書籍の おしらせ

弘前大学で見つけた 一〇七の言の葉ノート



平成二十六年六月、弘前大学出版会は設立十周年を迎え、これを記念して、『弘前大学で見つけた 一〇七の言の葉ノート』が出版されました。弘前大学の様々な分野の教職員百七名が、それぞれ座右の銘や心に残る言葉を選定し、その言葉を選んだ思いや背景などを、随想

(エッセイ)の形で紹介しています。医学研究科からも様々な講座の二十七名の教員が執筆しています。日々の仕事の姿とは違った、新しい発見があるかもしれません。医学科の学生はもちろん、教職員や卒業生、また弘前大学医学部への入学を考えている皆さん、そして市民の方々に、是非手にとって欲しい一冊です。定価千円(十税)と、お求めやすい価格設定になっています。弘前大学生協で扱っています。



研究室紹介

内分泌・糖尿病代謝・感染症内科
大学院生 松村 功貴

初めまして、内分泌・糖尿病代謝・感染症内科の松村功貴と申します。私は弘前大学医学部を平成二十一年に卒業し平成二十三年四月に同大学院医学研究科に入学致しました。今年度で医学研究科の最終学年を迎えております。今回は甚だ稚拙ではありますが、私の研究テーマに関してお話ししたいと思います。

研究内容は「膵β細胞における新たなインスリン分泌経路についての検討」です。ご存じの通り、ヒトにとって唯一の血糖降下作用を持つホルモンであるインスリンは、グルコースが膵

質が関与し最終的には先ほどの既知の経路と同様、インスリン分泌を促す事が考えられているのですがこれらの蛋白合成を阻害する si (small interfering) RNA という試薬を用いてインスリン分泌が低下するかを検討しました。使用する細胞は「MNCs細胞」というマウスのインスリンノーマ細胞から樹立した細胞なのですが、開始当初は手技がと

はじめまして。弘大附属病院一年目研修医の柞木田なつみと申します。

私の研修医生活はというと、先生方をはじめ周囲の皆様にお世話になりながら、日々自分の知識不足と不器用さに悩みつつ勉強するという毎日を過ごしています。

弘大附属病院には多様な初期研修プログラムがありますが、私は一年目を大病院で、二年目を提携病院で研修するプログラムを選択しています。研修が始まって四ヶ月が経過しましたが、一ヶ月目は消化器・乳腺・甲状腺外科で、二、三ヶ月目は内分泌・代謝内科で研修させていただきま

験と知識の豊富な先生方と共に働く研修医生活は新しい発見の連続で面白いです。もし弘大附属病院の研修で何か質問がありましたら、気軽に声をかけてください。よろしくお願ひします。

研修医一年目 柞木田 なつみ

コラム

医学部
こぼれ話

ずーっと前（数十年前）のある大病院の話。

ある日の夜、市内の病院から大病院に患者が運び込まれて外科で深夜に緊急手術が始まった。外科から基礎医学教室に向かっていたA大学院生も急遽学生徒動員で呼ばれて手術に参加することになった。その三日後の夜、再び市中の病院から大病院の外科に患者が運び込まれて緊急手術となった。A大学院生は先

研修医だより

弘前大学附属病院 卒後臨床研修センター

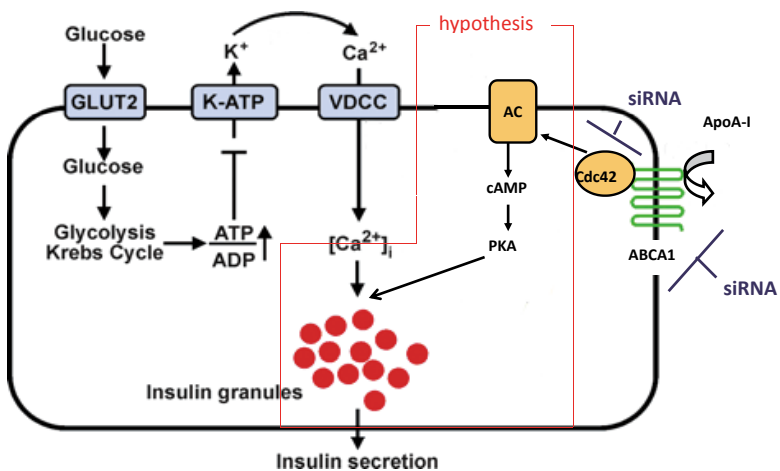
研修医二年目 高橋 和久

四月より本学附属病院で研修中の初期研修医二年目の高橋和久です。私の出身地は東日本大震災の被災地の一つ岩手県宮古市であり、まずは震災に係る医療支援等、被災地域の復興支援を応援して下さった関係者の方々に、この場をお借りして深謝いたします。

ご協力を得て、様々な手技を経験でき、主体性をもって診断や治療に携わる機会にも恵まれております。

七月には諸先生方のご協力を賜り、青い海と力強い風、緑豊かな半島が魅力的な津軽半島地域で唯一の救急告示病院である外ヶ浜中央病院での地域医療研修の機会を与えていただき、病診連携、介護福祉のみならず、へき地特有の社会問題を含めた「へき地医療問

膵β細胞へのApoA-Iの関与（仮説）



私は今まで三つの診療科で研修していますが、各診療科に共通して言えること

私は今までも三つの診療科で研修していますが、各診療科に共通して言えること

私は今までも三つの診療科で研修していますが、各診療科に共通して言えること

私は今までも三つの診療科で研修していますが、各診療科に共通して言えること



My name is Alex Sagar. I am a final year medical student at the University of Cambridge in the UK. I visited Hirosaki for one week in July as part of my student elective. An elective is a period of time in which every final year medical student at Cambridge studies at a different hospital, usually in a different country. I was recommended to visit Professor Hakamada in Hirosaki by Professor Lodge, a Professor of Surgery in Leeds, UK.

I found the week I spent in Hirosaki highly enjoyable. I greatly appreciated my experience of both clinical medicine and Japanese culture.

I learnt a good deal about surgery in Japan. I witnessed many operations including those to treat gastric cancer, pancreatic cancer, biliary atresia, inguinal hernias and gallstones. I also observed work on the ward and clinical research meetings. In addition to the hospital in Hirosaki, I also visited AKB* and a hospital in Odate. This has significantly increased my exposure to surgery.

I was very well taken care of by the doctors and medical students in Hirosaki. Everybody was polite and pleasant to me. This made me feel welcome. I very much enjoyed talking, eating and making friends with the doctors and medical students. I visited a yakitori and a sushi restaurant with them. Hara Yutaro and Gunji Yusuke, two final year medical students at Hirosaki, were very kind to me. They looked after me and took me sightseeing in Hirosaki. We visited the castle and the garden nearby. I learnt a lot from them about medical school in Japan and how it is both similar and different to England.

Looking back on the week I spent in Hirosaki, I am surprised by how much we did whilst I was there. The main thing however that I will remember about Hirosaki is how friendly and entertaining the people that I met were. Thanks a lot!

*AKB: Aomori Kosei Byoin

Alexがやって来た —ケンブリッジ大学からの臨床実習生—

消化器外科学講座 教授 袴 田 健 一

この七月、英国ケンブリッジ大学医学部学生のアレクサンダー・サガー君が当講座での臨床実習を希望して来日しました。丁度、クリニカルクラークシップのため六年生が二名、BSLの五年生が六名、研究室研修の四年生が十六名と、多くの学生が講座内におり、学生間国際交流の良い機会となりました。四年生の中には、今年から英語で発表することになった研究室研修成果を、事前にAlexにチェックしてもらうなど、ちゃっかりと利用した学生も多かったようです。一方、回診や手術、術前カンファレンスでは英語を用いることとなり、BSLの五年生は悪戦苦闘。コミュニケーションツールとしての英語の重要性を痛感したと口々に話しておりました。その中で、異彩を放ったのは六年生の原君と郡司君です。ある限りの言語力と医学的素養を駆使してAlexと終始対等に話

しておりました。同級生同士で話しやすいということもありましたが、言葉の壁を物ともしない彼らの国際コミュニケーション能力には感心いたしました。Alexが今回の実習に関するshort essayを寄稿してくれましたので、ご紹介します。



整形外科科学講座

整形外科科学講座 医長 大鹿 周 佐

弘前大学整形外科科学講座は、昭和二十二年に初代教授である佐竹逸郎先生が当教室を開講して以来、諸富武文先生、東野修治先生、原田征行先生、そして藤哲先生（現 弘前大学医学部附属病院院長）が歴任され、平成二十四年十二月より石橋恭之先生が第六代目の教授に就任されました。現在は十六名の教室スタッフと八名の大学院生（うち留学生一名）で診療・教育・研究に取り組んでいます。

整形外科は全身の運動器を対象とする診療科です。その対象疾患は、骨折などの外傷と、変形性関節症といった慢性疾患とに大別されます。慢性疾患においては、脊椎・関節疾患以外に腫瘍性疾患や先天性疾患なども扱い、小児から高齢者まですべての年齢の方を対象としています。当教室では五つのグループに分かれて運動器疾患の診療及び研究に取り組んでいます。脊椎グループは、脊髄腫瘍や側弯症手術といった一般病院では治療困難な症例を中心に治療を行っています。関節グループは、人工股関節置換術や各種骨切り術、また小児股関節疾患の治療を行っています。手外科グループは上肢外傷や先天異常疾患のほか、Microsurgeryの技術を活用した機能再建術を行っています。スポーツグループは、関節鏡視下手術を中心とした治療を行い、さらにスポーツ傷害予防のフィードバックにも力を入れています。また、四肢・体幹の運動器から発生する腫瘍性疾患（骨・軟部肉腫、転移性骨腫瘍など）を骨・軟部腫瘍グループが受け持ち、各グループと協力して診療に取り組んでいます。

両立を目指した教育にも力を入れています。また、地域医療を充実させるためには人材の確保が重要です。医学生の実習には特に力を入れ、地域に密着して診療と研究に取り組む弘前大学整形外科の魅力伝えるべく、昼夜を問わず勧誘に尽力しています。

大学病院の大きな役割の一つである研究に関しては、各診療グループのスタッフ及び大学院生が、臨床及び基礎研究に関する学会発表や論文作成に取り組んでおり、右肩上がりに件数は増えていきます。主な研究内容は以下の通りです。

研究室紹介



1. 脊柱靱帯骨化症や脊髄損傷の新しい治療法の開発
2. 脊髄脊椎疾患の疫学調査
3. 膝前十字靱帯の組織学的研究から再建膝のバイオメカニクス
4. スポーツ動作時の下肢アライメントの三次元動作解析
5. 変形性膝関節症の疫学調査および予防
6. 関節軟骨損傷や慢性腱障害の修復に関する研究
7. 骨巨細胞腫の臨床病理学的研究

今後、地域に貢献しつつ弘前から世界に発信していくため、若手教育の充実と研究の推進に取り組

み、高いレベルの医療を提供できるよう努力していきます。



病理診断学講座

病理診断学講座 教授 黒瀬 顕

病理診断学講座が臨床講座として開設されてもうじき四年、皆様のご協力でこれまで来た事に感謝し講座および病理診断科の現状と将来像をご紹介します。

【スタッフそして】

本年四月加藤哲子先生が准教授として着任。加藤先生は山形大本山教授（本学出身、婦人科病理の権威）の下で准教授を務め外科病理全般に造詣が深い。本学は勿論青森県の外科病理の重鎮たること間違いなく、そして、将来入局を表明してくれる学生も誕生。

【病理診断科フローズアップ】

二〇〇八年に病理診断科が診療標榜科となり、十二年常勤病理医二名以上の病院の保険点数加算、そして今春病理診断科の正式標榜による保険点数加算を受け、病院の素早い対応のおかげで「病理診断科診察室」（患者や家族に病理組織を説明する病理外来）が誕生し病理診断科の正式標榜となった。「病院に常勤病理医が二名以上居ることが医療の質の確保の上で重要」と厚生省が表明したわけである。学生の皆さん、病院評価に常勤病理医が居るか否かは大きなポイントです。赴任当初花田院長にお願いし十人用のディスカッ

ション顕微鏡を入れてもたった時業者に聞いて驚いたのだが十人用顕微鏡は東北地区では初とのこと。病理診断科が如何に機能しているかはディスカッション顕微鏡の有無や規模を見れば分かる。そして藤病院長に常設カンファレンスルームを整えてもらった。あとは地道にやるだけである。

【医療での病理診断科の役割】

病理診断や剖検等ルチンワークをこなすだけであれば病理診断科は必要ない。病理診断科の意義は常時臨床医とともに(1)ディスカッションの場、(2)相互教育の場、(3)医師特に若手外科医にトレーニングの場を提供する事にある。「臨床医とともに病態や診断を考え、患者に最適な治療を導き出し、そして検証する場」を実践できれば必ずや大学全体の医療・医学の質的向上に貢献すると信じる。これが我々の目指す病理診断科であり信念であり矜持であって学生にはここ理解してもらいたい（よって病理診断科は臨床医がアクセスしやすい場所に位置し、大部屋の中心にディスカッション顕微鏡、その周りにソファ、壁面には過去の標本が収納され、コーヒージーム refreshments が常備され臨床医が休憩に訪れて気軽に病理医や技師と標本を

みたり患者の病態について会話できれば最高！よりよい治療や臨床医病理医の相互教育につながり医療の質的向上に及ぼす効果は大!!これが究極の理想。

【病理の風評被害】

某雑誌の各科の印象を若手医師に問うたアンケート結果によると「影の薄い科」「コミュニケーション能力の低い人が多そうな科」の堂々一位がいずれも病理！ Doctor of Doctors と言えば恰好よいが病理医が相手にするのは（病理外来を除く）臨床医である。ディスカッションができればやつてられない。しかし人前で話すより個人でこつこつ努力するタイプの人、それはそれで臨床医から信頼される素質無しとしないのである。また別意見に「病理医は QOL が高そう。世界的に有名なテノール歌手の教授とかもいる」とあるが本当である。病理は確かに時間的融通は効く。仕事、家庭、趣味：この辺をどう考えるかは個々人の人生であり多様な価値観を認められる成熟した講座にしたい（最近病理医は給料が低いという誤解は低下したがふと気付いた。確かに病理医の外車保有率は低い、というか本学では皆無！だがこれは多分に嗜好によるものである）。

【育児支援】

「子供は社会皆で育てる」という意識改革が今の日本に必要だと思う。育児は大変である。予測がつかない。子供に親が愛を注げるよう職場が手助けすれば他人の子であっても育児に貢献したことになる。

【HP】

当講座のHPをご覧下さい。今の時代HPは大事と専門家にレイアウトしてもらったがここ二年放置状態という最悪パターン。本学医学部のHPと似るが当講座の方が先発です。ちなみにこのHPで一番の評判は「つがる点描」と「女医さんからのメッセージ」。

【病理医の現状】

病理医は微増しているが足りない。病理学会はしきりに絶滅危惧と言うが病理医自身が大変だと言ったところで誰も耳を貸す訳ない。麻酔科医が足りないとなれば外科医は困るという類いの連想が病理医に対しては無い。これは今まで医療としての病理診断科の教育が欠如していたことと病理医自身が医療の検証のための病理の重要性を示せていないためだと考える。

【病理診断体制】

皆さんご存じなかうが弘大の病理（筆者がではない）は外部からの評価が高い。それは病理診断を基礎や保健学科の病理医もまじえ全体で行っているからである。このことは後期研修医の教育の上でも極めて有利な環境を意味する。医療

が細分化され一人の病理医が全臓器に関し万能であるなどあり得ない。高度の専門性が要求される病理診断はその専門家が行わなければならない。大学の医療に貢献できない。簡単な話である。弘大の病理教室は仲良しなので

【卒後教育】

病理診断はものの見方でありこれを習うためには一施設に居たのではダメというのが当講座の教育方針。国内外の色々な施設を体験して自分の見方を築いてもらいたい。前述のOB先生は喜んで引き受けてくれるし他の施設もある。また病理医以外の臨床医の教育も病理診断科の大事な任務である。本学に留まる皆さんは病理医にならずとも本学に残って良かったと思える良い医師になれるよう卒業してから厳しく教育します。

【学生教育】

BSLは一週間基礎講座の協力も得て行っている。この間学生は標本作製や術中迅速診断報告（執刀の先生のご協力に感謝します。優しく対応して下さいと学生の評価が高まります、きつと）を体験する。そして「病理診断依頼書の臨床事項の記載を見れば臨床医の力量が分かる」ことを理解し医師の素質を涵養する。何となれば病理診断に何を期待しそのためにはどのような臨床情報が大事かを取捨選択できるといふことは臨床医がどれだけ患者の病態を把握しているかによるからである。

【学生の皆さんに】

読書と部活を一生懸命やって下さい。学生時代に大事ななのは自分の哲学の基礎を築くことです。NEJM の journal club も始めました。予習不要で「自分は出来が悪い」と思っている学生さん大歓迎。話変わって、弘大卒の病理教授は多い。増田しのぶ先生（日大）、一迫玲先生（東北大）、長尾俊孝先生（東京医大）、三上芳喜先生（熊本大）など皆さんそれぞれの分野の権威。病理医になれとは言いません。「病理の重要性を認識している臨床医になる」ということが良医にな

る上での秘訣であることを是非分かってもらいたい。

【病理診断科・病理部】

臨床検査技師七人（うち細胞検査士四人）と事務一人で標本作製、細胞診、学生指導、剖検介助等、毎日遅くまで働く。学会や研究への臨床医からの要望にできる限り応えることも病理診断科の責務と受け止めるが、このあたり大事なのは信頼関係です。

【名は実の實なり】

あらためて当講座は恵まれた環境にあることに感謝し、本学の医療・医学の質的向上と良医を輩出するに少しでも貢献すべく努めたいと思いますので宜しくお願いします。「名は実の實なり」とは蓋し病理の手下とすべき言葉と思っています。



メルボルン No Worries

循環呼吸腎臓内科学講座

助教 藤田 雄

この原稿を書いている八月四日、Facebook を見ていると弘前がすごく暑いことやねぶた・ねぶたの熱気が伝わる投稿が踊っていました。本当にここは「寒い」です。この寒さに一役かっているのが強風とゲリラ雨です。ふとした拍子に強風と雨が吹き付け、かと



敷地を持っています。MMC は飛び地として、その近くに存在し臨床・研究が盛んに行われています。入国前はそこらじゅうにカンガルーやコアラがいるのかと思っていましたが、現時点で動物園でしか見ていません。動物園の人気者はキリンやゾウ、ライオンでした。

留学だより

思ったら止み、暖かい太陽が覗く事もしばしばです。山の天気となにやらはとありますが、この天気も予想不能です。

四月から私が勤務している Monash Medical Centre (MMC) はオーストラリア、第二の都市であり、世界一住みやすい都市ランキングで一位のメルボルンにあります。Monash 大学は市の中心部より東の郊外に位置しており非常に広大な

所属する Centre for Inflammatory Disease は、主に ANCA 関連血管炎を中心とした T 細胞の研究をしている私の Boss である Stephen Holdsworth 教授の腎臓グループ、他にも膠原病グループ、肝疾患グループ、白血球輸送研究グループがあり、それらがまとまった施設です。炎症というく



的な環境です。

オーストラリア人は以前はいわゆる白豪主義という政策をとっていた数十年前が信じられないくらいの大船を切つて、最大規模の移民受け入れ国となっていました。アメリカやイギリスにおいては労働や治安の問題で移民自体が問題になってきていますが、カナダやオーストラリアはいまだ移民を受け入れ続け、国の人口は増える一方です。私の勤務するラボにも親が移民のベトナム人、パキスタン人であったり、幼少期に家族で移住してきたマレーシア人、クロアチアの紛争の時に移住してきたクロアチア人など多彩な背景のスタッフが働いています。

そのような多民族国家となっているオーストラリアですが、移民受け入れが日常となっているため、私のような存在にも非常に優しく親切丁寧に接してくれま

人事異動

● 大学院医学研究科

研究休職 (26・6・1)

循環呼吸腎臓内科学講座 助教

藤田 雄

辞職 (26・6・30)

法医学講座 教授

黒田 直人

(福島県立医科大学)

眼科学講座 助教

伊藤 忠 (開業)

採用 (26・7・1)

脳神経外科科学講座 助教

麓 敏雄

眼科学講座 助手

陳内 嘉浩 (眼科・医員)

辞職 (26・7・31)

放射線科学講座 講師

成田 雄一郎

生体構造医学科学講座 助教

谷 利樹

(独立行政法人 理化学研究所)

昇任 (26・8・1)

耳鼻咽喉科学講座 教授

松原 篤

(耳鼻咽喉科学講座 准教授)

脳神経生理学講座 助教

古川 智範

(脳神経生理学講座 助手)

診療教授等新規称号付与者

診療教授

對馬 敬夫 (呼吸器外科)

(26・6・1) (29・5・31)

辞職 (26・8・10)

脳神経外科科学講座 助教

吉川 朋成

● 医学部附属病院

辞職 (26・5・31)

産科婦人科 助教

佐藤 麻希子

(青森県立中央病院)

辞職 (26・6・30)

高度救命救急センター 助手

川村 知紀

(ベンシルバ大学リサーチフellow)

集中治療部 助手

島田 拓

(消化器外科 乳癌外科 甲状腺外科・医員)

消化器外科 乳癌外科 甲状腺外科 助教

三浦 卓也 (青森厚生病院)

採用 (26・7・1)

産科婦人科 助手

田村 良介 (医員)

集中治療部 助手

石橋 祐介

(泌尿器科・医員)

集中治療部 助手

木村 俊郎

(小児外科・医員)

昇任 (26・7・1)

消化器外科 乳癌外科 甲状腺外科 講師

木村 憲央

(消化器外科科学講座・助教)

配置変更 (26・7・1)

泌尿器科 助教

今西 賢悟 (集中治療部)

採用 (26・8・1)

高度救命救急センター 助教

青木 哉志

(ベンシルバ大学リサーチフellow)

辞職 (26・8・10)

脳神経外科 助手

菊池 潤

公益社団法人青森医学振興会のご紹介と入会のご案内

理事長 棟方 昭博



平成20年12月の公益法人制度改革関連法の施行に伴い、当法人は青森県知事の認可を得て、昨年4月1日から新たに「公益社団法人青森医学振興会」となりました。

「公益社団法人」は、新しい認定基準により公的に認められた公益性の高い法人で、認定された公益事業の法人税は非課税となり、また当会への寄付金には、寄附された皆様様の所得税や法人税における控除が認められます。

なお、詳細については、ホームページ「公益社団法人青森医学振興会」にてご案内しておりますのでご覧下さい (<http://aomori-mpm.jp/>)。

つきましては、当振興会の設立の趣旨を御理解をいただくとともに、事業の遂行のために是非、活動にご賛同を賜り、ご入会とご寄附をお願いできれば幸甚です。皆様様の温かいご支援、ご協力を心からお願い申し上げます。

平成26年9月吉日
公益社団法人 青森医学振興会
理事長 棟方 昭博

編集後記

異常気象という言葉が使われ始めて十年程が経ったと思いますが、今夏はこのことを改めて思い知らされたように感じます。七月初めには既に熱中症のニュースが飛び交い、その後は複数の台風もありましたが、何よりもこれまでに聞きしことがないような大雨が各地で続きざまに甚大な被害を残していきました。この弘前でもお盆明けは梅雨を遥かに凌ぐ雨と湿気が

続きました。被災された方々には心からお見舞い申し上げますとともに、不運にも犠牲になられた方々とご遺族の皆様に対しまして深くお悔やみ申し上げます。

そんな異常な夏もいつしか過ぎて行き、学生の賑やかな声が再び校舎に響き渡る季節が近づいてきました。今号の医学部ウォーカーも前号に引き続き、学生の方々(医学部学生一年生・五年生と大学院生一年生・四年生)からのご寄稿を頂き、充実した面白い内容になっていますように感じます。当り前のことですが、全ての学生が其々の想いを抱いて医学科に入学していることを改めて思い起こさせます。夏休みで十分に若いエネルギーを補給した学生に対応すべく、こちらも英気を養いたいところですが、現実に来ることを言えば、ようやく取れた遅い夏休みを人間ドックと胃・大腸内視鏡検査に使い、今度の冬が異常気象にならないことをただ願うばかりです。(下田 記)